

琉球大学学術リポジトリ

オリイオオコウモリのねぐら選択と集団形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣田, 裕枝, 中本, 敦, 金城, 和三, 伊澤, 雅子, Nakamoto, Atsushi, Izawa, Masako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/853

廣田裕枝¹⁾・中本 敦¹⁾・金城和三²⁾・伊澤雅子¹⁾¹⁾ 琉球大学理学部 ²⁾ 沖縄国際大学法学部

一般に、オオコウモリ属の多くの種は群れ性が強く、ねぐらについても特定の本を長期間集団で利用することが知られている。これに対して、沖縄島に生息するオリオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus* は、単独性の社会を持ち、ねぐらに関しても頻繁に場所を変えながら単独で利用することが知られている(金城 1999, 中本 2003)。しかし、時折、数十頭ほどの個体が集団でねぐらを利用して観察されている。そこで、本研究では、ねぐらの利用様式と集団形成のパターンを明らかにすることを目的とした。

2004年12月～2006年1月に、6ヶ所の都市公園や斜面林で、毎月一週間程度、日中にルートセンサスまたは定点観察を行い、ねぐらで休息しているオオコウモリの性・齢・頭数を記録した。また複数個体が同時に見られたときは個体間の干渉行動も観察した。

全調査期間で、のべ305ヶ所のねぐら(579個体)を発見した。このうち、3個体以上が集まった集団ねぐらは37例(全ねぐら形成数の12.1%)であった。集団によるねぐら利用は、樹木内での位置や集団サイズ、利用した木の数により、3つのタイプ(タイプⅠ:1本の木の樹冠の奥に形成、タイプⅡ:1本の木の露出した樹冠部に形成、タイプⅢ:複数の木にまたがって露出した樹冠部に形成)に分けられた。タイプⅠは冬期(2～3月)に特定の本で数日間の安定した利用が見られた(11例)。タイプⅡ・Ⅲは4～11月に不特定の本で一時的なねぐらが形成され(それぞれ18例と8例)、集団サイズが大きく、個体間の干渉が頻繁に起こることが特徴であった。

集団ねぐらの各タイプの特徴から、集団化の要因は、冬季とそれ以外の月(4～11月)で異なっていると考えられた。タイプⅠの集団化は、気温の低い冬季に風雨を避けるのに適したねぐら場所が相対的に少なくなるために、そのような木が複数の個体によって重複して利用された結果であると考えられた。また個体が相互に密着することで体温調節を行っている可能性も考えられた。タイプⅡ・Ⅲの集団化の要因は特定できなかった。しかし、集団内で観察された干渉行動が、時期や行動の内容、また、参加する個体の性比がオスに偏ることなどの点で、夜間突出したヤシに複数のオスが集合する現象(金城ら 2000)と類似していたことから、このような追いかけあい行動の連鎖による夜間の集合が翌日のねぐら形成時まで持ち越されたことも要因として考えられた。ただし、夜間の集合が幼獣・亜成獣で構成され、遊びの要素も含むことに対し、ねぐらでの集合は成獣によって構成される点で異なるため、繁殖との関連も考えられた。